

目 的

センサーカメラを利用した継続的なモニタリング調査を行うことによって低密度の段階での生息状況を把握し早期の対策に繋げ、シカ被害の拡大防止に資する。

また、捕獲事業に向け現況のニホンジカ（以下シカ）の生息範囲の広がりやの把握・低密度での管理方法を明らかにし、森林の有する多面的機能を守る。

背 景

- 2018年7月～ 棚倉森林管理署職員によるセンサーカメラでのシカ生息調査開始
- 2018年9月 当署管内(センサーカメラ)でシカが初めて撮影された
- 2020年4月 センサーカメラを徐々に増設し調査範囲拡大、シカの撮影頻度も増加
- 2020年5月 当署管内初のシカによる森林被害(食害)が発見された (E)
- 2020年7月 棚倉食害地現地調査
→シカによる食害であることが確認
- 2020年9月 「奥久慈地区におけるニホンジカ生息状況調査事業」開始

生息調査範囲の拡大・捕獲を視野に調査



(2)使用機器

- ・ LED搭載自動撮影カメラ TREL10J-C (GISupply社製)
- ・ 鈎塩 (誘引効果があるか検証)

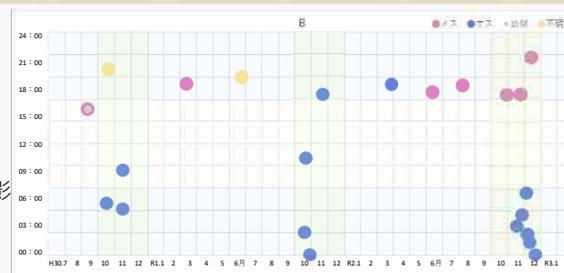
(3)撮影条件

- (i) 静止画 インターバル：2分 連続撮影：2枚
- (ii) 静止画 インターバル：1分 連続撮影：3枚 2020/9/16以降

結 果

結果①

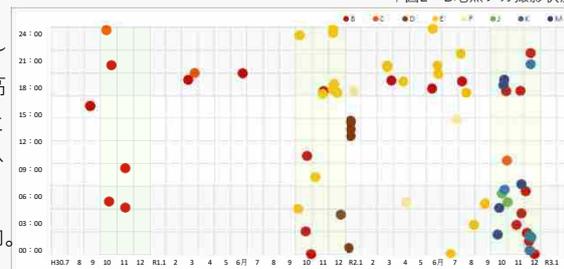
10月～12月に撮影頻度が高い傾向。また、メスジカは18時頃～21時頃撮影頻度が高い傾向。



↑図2：B地点シカ撮影状況

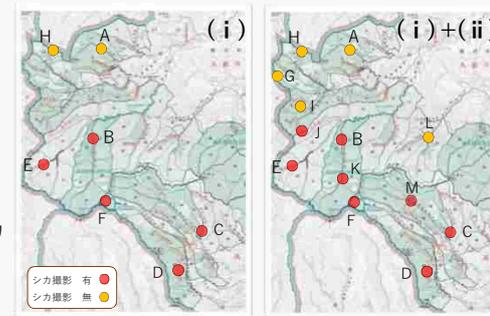
結果②

全体を見ても10月～12月に撮影頻度が高くなる傾向。日中に撮影される頻度は少なく、18時～6時に撮影頻度が高い傾向。

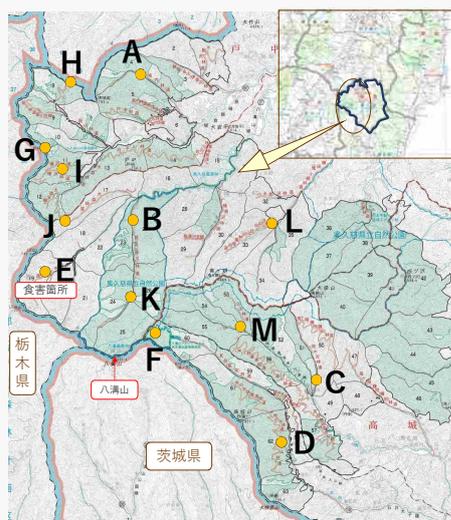


↑図3：調査地全体のシカ撮影状況まとめ

結果③ 長期間撮影されていなかったCで再びシカが撮影された。(期間(ii)) Mではオスジカが高頻度で撮影され若いオスジカも確認された。Jではオスジカが撮影された。



試 験 地



	設置日	シカ撮影	鈎塩	
(i)	A	2018/7/24	無	○
	B	2018/7/25	有	○
	C	2018/8/8	有	○
	D	2018/9/10	有	○
	E	2019/1/21	有	○
	F	2019/12/20	有	○
	G	2020/4/2	無	○
(ii)	H	2020/9/16	無	○
	I	2020/9/16	無	○
	J	2020/9/16	有	○
	K	2020/9/16	有	○
	L	2020/9/16	無	○
	M	2020/9/16	有	○

↑表1：設置日・設置場所まとめ
←図1：センサーカメラ位置図

委託事業開始日からの期間を(ii)とし、それ以前を期間(i)とする。ただし鈎塩は委託開始とともに設置。

調 査 方 法

(1)試験地選定方法

- (i) 生息状況を把握することが目的とし以下の条件のもと選定。
 - ・ 目撃情報のあった箇所周辺であること
 - ・ 獣道、もしくは獣道周辺であること
- (ii) 拡大範囲を把握することを目的とし以下の条件のもと選定。
 - ・ 県境側を中心に全体的に配置すること
 - ・ 林道沿い、獣道、尾根周辺であること



↑写真1：Bで撮影されたメスジカ

結果④ 鈎塩を設置したすべての箇所でもシカが撮影されたが、誘引されているデータは得られなかった。また、鈎塩をなめた痕跡もなかった。

考察・今後の展望

生息範囲について、センサーカメラの調査結果から推測すると八溝山を中心に栃木県境から茨城県境にかけての範囲と考えられる(結果③)。また、撮影頻度から見ると生息範囲内の密度は低いと考えられるがスポット的に撮影頻度が高い箇所(B・E・K・M)があると考えられる(結果②・③)。

シカの捕獲方法について、シカが高頻度で撮影される時間帯は18時頃～6時頃の暗い時間帯であるため銃猟ではなく、時間に関係なく使用できるわな猟が有効だと考えられる(結果①・②)。また、捕獲時期はシカの繁殖期である10月～11月前後にシカの撮影頻度が高いためこの時期にわなを仕掛けることが有効であると考えられる。さらに、わな猟の誘引物質について、八溝山系(棚倉署管内)のシカには鈎塩の誘引性は認められなかったため、捕獲を見据えヘイクューブやアルファルファなど他の誘引効果のあるものを探る必要があると考える(結果④)。

最後に、福島県、茨城県、栃木県の3県が連携してシカの生息調査や捕獲を実施していることから、これらの関係機関等と密に連絡を取り、八溝山周辺のシカ生息状況を明らかにするとともにシカ捕獲を視野にいれた被害対策に努め、シカによる森林被害の拡大を防いでいきたい。-86-